

## 想像界の生物相 鬼の目力

三重県立斎宮歴史博物館学芸普及課長 榎村 寛之<sup>えむら ひろゆき</sup>



資料名 | トシドンの面

標本番号 | H0062048

地域 | 日本

サイズ | 高さ 73cm × 幅 40cm × 厚さ 16cm



資料名 | ナマハゲの面（赤鬼）

標本番号 | H0122399

地域 | 日本

サイズ | 高さ 60cm × 幅 34cm × 厚さ 18cm



資料名 | <sup>ヌオシー</sup> 儼劇用仮面

標本番号 | H0191117

地域 | 中国

サイズ | 高さ 34cm × 幅 17cm × 厚さ 10cm

ロシアの文豪、ゴーゴリの短編小説に「ヴィイ」というものがあり、そこに、悪魔祓いの円陣に守られた者も見とおす、ヴィイという怪物が出てくる。長い晩が地面まで伸びて、そばにいる者によって上げてもらわないと何も見えないという魔物だとされる。麻野嘉史氏の研究によると、ゴーゴリの生まれたウクライナを含むスラブ地域には長い睫毛、眉毛をもつモノの伝承があり、邪視を象徴する造形だという『増補改訂版ヴィイ調査ノート』、私家版、二〇一四年）。

### ◆◆鬼の目の光◆◆

民博で世界の仮面を見ていると、たしかに目が強調されているものが多いことに気づく。世界的に、超時代的にも、視線は恐ろしいものであり、かつ頼もしいものでもあった。そういう日本においても同様のことが指摘されている。例えば古代の宮廷でおこなわれた大饗（だいな・倭訓おにやらい）で目には見えない疫鬼を追う方相氏は「黄金四目」とされている。目はわざわざ金色にして、その光の力を強調していたのである。この方相氏の造形は古代中国の饗という祭に淵源があり、朝鮮半島にも伝わっていた。古代東アジアにおいては黄金四目の怪人が悪鬼を追う存在だった。



三重県斎宮跡にある、いつきのみや歴史体験館で再現されている追儺の祭

ところが四目の造形は東アジア各地で一〇世紀ごろから次第に衰退していく。日本では平安時代に「大饗」は「追儺」と

改称され、方相氏は疫鬼そのものとみなされる。有角で牙をむくその造形はわたしたちの知る鬼の造形に影響を与えたと考えられている。さらに平安時代末期には、修正会とよばれる仏教儀礼のなかでも「追儺」がおこなわれるようになる、これもまた鬼追いであり、節分の豆まきの直接の祖先と考えられている。しかしこの儀式の主役は「豆」で、四つ目の方相氏はもはや出てこない。そういえば寺院の屋根には、奈良時代以来恐ろしい顔の破邪の面、いわゆる鬼瓦が座っていた。寺院では鬼は最初から二つ目なのである。

### ◆◆見通す者としての鬼◆◆

しかし注意したいのは、光る鬼の目がいろいろなことを見とおすモノとして重視された文化事例が今でも各地で見られることである。例えば男鹿半島地域で見られるナマハ

ゲ、能登半島地域などで見られるアマメハギのような儀礼にあらわれる鬼。彼らは年の変わる時期にあらわれ、子どもたちを脅し、いい子になることを約束させる。それは行く年の悪事を見とおし、新年の到来を祝福するという来訪神の姿だといえる。似た意識は甕島のトシドンをはじめとした南九州から沖縄の島嶼地域にも見られ、折口信夫以来、日本の基層文化、外来者を神とみなすマレビト信仰と考えられている。その当否はここでは問わないが、注目したいのは、ナマハゲ面の目もまた金色をしており、その光る目が見えないものを見とおす、という意識がうかがえることである。

じつは本家の中国でも、宋代以降には、饗で悪霊を追うのは「開山」「鍾馗」など二つ目の怪人になるのである。目の数ではなく、巨大な目の光が破邪に繋がるという意識が日中双方で見られることは興味深い。

こうした習俗とは直接かわらないが、本来年の瀬の忌籠りの時期におこなわれる祭りだったと見られる奥三河の花祭にあらわれる踊る鬼などにも類似した意識は見ることができよう。追儺の方相氏は鬼とみなされ、節分に追われる鬼となっていた。しかし鬼の目力が悪霊を追うという思想は、東アジア各地で今も生きているのである。